

第六卷あらすじ

「マギラ」の本拠地で起こった火災で、顔に大火傷を負ったゼムラは、この出来事を復讐の絶好の機会と考え、サムとナジムをその首謀者に仕立て上げます。

ゼムラの軍隊によって捕らえられたサムとナジムの裁判は、過去の重臣やゼムラ一族の末裔、それに、世界中の国々から、自由と豊かさを求めてこの国へ訪れた人々を集めて開かれました。

この裁判において、サムとナジムは先祖の犯した過去の過ちを知らされます。

ゼムラは、子供の頃より言い聞かされた、サムの実父によって一族にもたらされた過去の酷き仕打ちを、聴衆に向かって語りながら、一族の受けた苦しみは、サムとその一団によって償われなければならない――、と宣告します。

しかしサムは、罪も無い村人を裁けば、「マギラ」によってその事を知ることになる、世界中の人々を敵に回すこととなり、第一、判決の内容を知った村人の怒りが街へ向かえば、多大な犠牲者を作ることになり、国の内紛は、国を滅ぼす道へ向かうのだ――、と訴えます。

しかしゼムラは、……そのときは、物理兵器として完成させた「マギラ」を使い、村ごと村人を焼き払い、世界中がその威力を目の当たりに見ることになるのだ。そのとき世界はその威力に恐れおののき、益々「マギラ」の力を求めることになるであろう――と、言い放ちます。

サムは、ゼムラとのそのような遣り取りの中で、埒があかないと判断すると、心の中に或る決断を下し、自分が罪人であることを告げます……

ナジムと村人を救うために告げられたその「ことば」によって、サムには、磔火あぶりの刑が言い渡され、村の生産物の全てが徴収されることになり、ナジムは村に返されることとなりますが、その交換条件に、実行犯の差し出しが命じられます。

村に戻ったナジムは、村人への処罰は告げずに、心の内に企てた、サム奪還の秘策と、ゼムラの隠す「マギラ」の秘密を打ち明けます。

そんな中、放火の実行犯が名乗り出ます……

しかしゼムラは強引にも、長年抱き続けた計画に沿って、サム達一族への復讐劇を進めて行きます。

そしてとうとう、悪魔払いと称された大罪人の処刑実行を報せる大花火の打ち上げられる、その日はやって来ます……